かけがえのない山、川、里。生命めぐる、我が美しきふるさと。
映像とエッセイでつづる、人と家と暮らしの物語。

志太平野

四

塩の道、海の道の拠点。水の恵みの城下町……

牧之原市 相良

相良城本丸跡、現在の相良庁舎、相良資料館から、萩間川河口を臨む。

編集人／杉村喜美雄（ハイホームス）
撮影／村山正良（M2WORKS）
文／岡本 國治（岡本戦略広告事務所）

もし、自分の足で歩く以外に移動手段がなかったら？そういう時代に生きていたら？山ひとつ、川ひとつ越えた《向う側》は、よそ者の土地であり、その距離感は、移動できるスピードが遅い分、現在と比べものにならないほど遠く離れたイメージだったのではないでしょうか。

江戸時代。駿河湾の南西海岸、外海近くに位置する《相良》は、ふたつの道によって、広い世界に開かれていました。

ひとつは、相良を起点に、掛川・森町・秋葉山・水窪を経て、深山の秘境、青崩峠を越え、信州諏訪に至る、「塩の道」。もうひとつは、相良湊（みなと）から菱垣・樽廻船によって、遠州以東の年貢米、特産品を、江戸や大阪へ積み出す、「海の道」。つまり、江戸時代の相良は、陸路と海路の両方で、物流の集散地であり、地域の中心的な役割を果たしていたのです。

年間を通じて日照が豊かで、白砂青松が続く遠浅の海岸。相良の気候・地形が、貴重な塩づくりを興す恵みとなりました。江戸と大阪を結ぶ航路の途中にあり、また内海の入口にあるため、風雨のひどい時は避難しやすい。海路における立地の良さは、、自然の良港に賑わいをもたらしました。

相良から小笠に入ってすぐの旧道に塩買坂（別名正林寺坂）があります。塩の交易が行われたことを示す地名が、室町時代の史料にも見られるところから、相良では相当古く

から塩がつくられていたようです。この塩づくりを本格的に始めさせたのは、あの徳川家康です。

天正九年（一五八一）、高天神城を武田勢から奪還して遠州を制圧した家康は、同十四年（一五八六）、武田勝頼が築き、当時は廃城になっていた相良古城を別荘に改造して、相良御殿と称し、鷹狩りの拠点としました。これを機に住人が増え始め、文禄四年（一五九五）には二十六軒が整い、これが相良新町の始まりとなりました。ここに家康は、奉行に命じ、新町本陣に竈場（かまば）を築かせ、塩の生産を始めたのです。竈場および家康の勧請した荒神社（竈の神様）は、相良御殿、後の相良城本丸の裏手にありました。

相良藩が立藩されたのは宝永七年（一七一〇）。初代藩主は本多忠晴で、以後本多三代および、宝暦八年（一七五八）に藩主となった田沼意次も製塩に力を注ぎました。

相良の塩は、塩畑に海水を汲み上げて撒く「揚浜式製塩法」で、真白い上質の塩が特長でした。

塩の道（信州街道）の起点は、相良城下の北西、現在の大原。飯津佐和乃神社の御旅所のあたり。終点は中山道の「塩尻」で、その行程およそ二〇〇km。牛馬の背に塩を積み、険しい峠をいくつも越えて、五日ほどかけてやっと辿り着く塩尻は、文字通りはるかな異国だったに違いありません。

※1：潮の干満を利用して塩田に海水を入れる方法を「入浜製塩法」といいます。

※2：「塩尻」の地名は、太平洋岸から入る「南塩」と日本海岸からの「北塩」、双方の塩の終点（尻）にちなむと言われています。

しかし、この旅は塩や魚を運び、帰りに米やタバコなどを持ち帰るだけのものではありませんでした。道中には、東海道の宿場町・掛川、遠州の小京都と謳われた森町、江戸っ子の参拝で賑わう火鎮めの秋葉神社があり、さらに中山道にもつながることで、京都・江戸の文化や、沿道の名産・情報を、山の国と海の国、その間にある街道筋すべてに運び、交流させる役割をも担っていたのです。

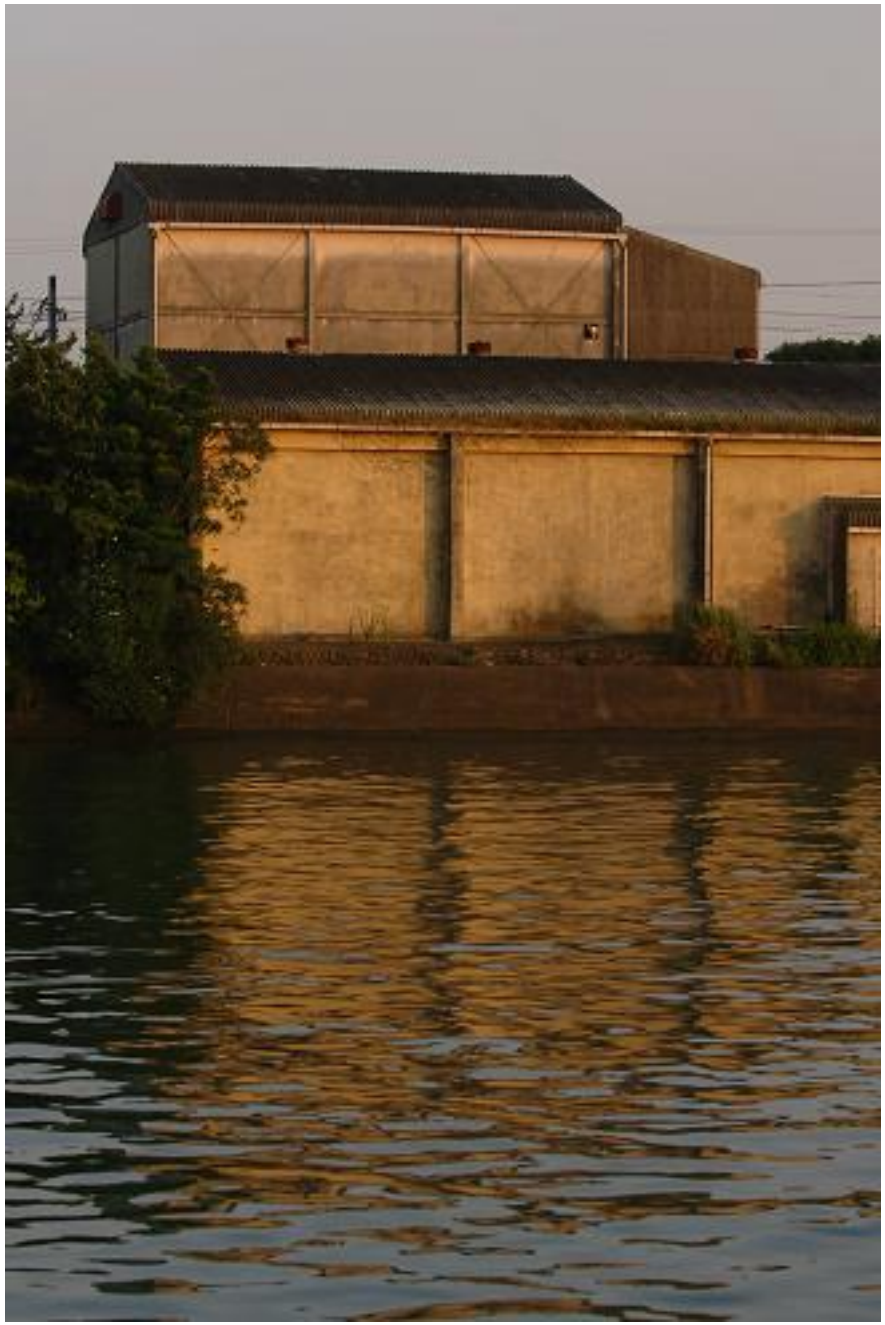
相良藩主となった田沼意次は、新しく築城し、貧しい家には長期低利で資金を与え、町屋の屋根を瓦葺・板葺に変えさせるなど、城下町の整備、町づくりを進めました。また、湊橋を架け、ここを起点に東海道藤枝宿まで約七里（二八km）の田沼街道を開き、萩間川の河口には相良湊を改修して、千石船を含む船が自由に出入りできるようにしました。

現在の相良を歩くと、随所に名跡、名刹があり、風情をたたえた家並に出会うことができます。相良橋から萩間川の川面に日が沈む夕景を臨んでいると、ここが確かに、陸路と海路で栄えた、歴史あるまちであることが伝わってきます。

東海道本線の開通とともに、物流の主役の座を譲ってしまった相良。しかしそのために、伝統的な文化や生活が時代の波に流され過ぎることもありませんでした。この独自性こそ、新しい相良へ導く底力になるのではないでしょうか。

参考資料：「塩の道起点 相良塩づくり物語」編著者 川原崎次郎／発行 相良町（平成9年8月）
「牧之原市相良資料館」資料

3



大徳屋

翔